

実用車主流のときに登場した軽快車「機関銃印」 1951年



昭和20年代は戦争で荒廃した日本の国土復興が進められていたときで、その物流の中心として活躍したのが自転車でした。運搬を目的とした実用車は車体が太くてがっしりとし、荷台やスタンドは大きく、タイヤも太いものを使っていました。

そのときに登場したのが機関銃印の自転車でした。前輪の泥よけの上に付いている機関銃の形をしたプレートは、イギリスのスイフト社のトレードマークで、その意匠を取得していた日本スイフト社が製作したものです。

車体は実用車から比べるとほっそりとし、当時としてはスマートな自転車でしたので、目立つ存在でした。しかし、サイクリングなどに利用しようという社会環境にはまだなく、主に通勤・通学として使われていました。

自転車文化センター 谷田貝一男